# 随筆

## 私の楽しみ
### 命どぅ宝～命のゆいまーるプロジェクト～

沖縄県立中部病院 地域救命救急科
高良剛ロベルト

ある日、勤務を終え医局のメールボックスを覗くと、県医師会からの封書が届いていた。そこには沖縄県医師会報へ随筆を書くようにと広報担当理事の當銘先生のお名前で書かれた依頼文が入っていた。

内容は青春の思い出、一枚の写真、趣味などの他、紀行文、特技、書評など何でも良いとのことであった。はて、これらのキーワードに当てはまることで書けることはあるのかと考え込んでしまった。趣味らしい趣味も持たず、青春の思い出と言うと汗臭い仲間と野球部で過ごしたグランドの風景や、告白も出来ずに悶々としたまま終わった片思いの初恋しか思い浮かばない。とても人様にお披露目できるものではない。紀行文が書けるほど旅行もしていない、特技と言えば黙って人の話を聞く程度か。うーん、困った。ふと机の上を見るといくつかの島で仲間と一緒に撮った写真が目に映った。これだ！今の僕を支えている趣味と実益を兼ねたボランティア活動、その名も「命どぅ宝～命のゆいまーるプロジェクト～」について書こう。

私は県立中部病院地域救命救急診療科において頂いている。私のような平凡な医者が、百戦錬磨のスーパードクターが並み居る救命センターに置いてもらっている存在意義は何かと日々考えるのだが、診療科名にある「地域」に私の存在意義は有るのだろうと勝手に考えている。

ただ漠然と医者になりたいという想いだけで医学部を目指していたのだが、運良く自治医科大学にて医療を学ばせていただいた。これは、今にしてみれば運命だったのかも知れない。地元R大学の医学部を受験したとき、面接の教授に鼻で笑われた苦い思い出とともに、「この大学には一生入れてもらえない」という想いが植え付けられたのだが、自治医大を受験したときはなぜか「この大学に吸い寄せられている」という不思議な感覚があった。

沖縄にはどのような離島が有るのかもよく知らないまま、「医療の谷間に灯をともす」という建学の理念に惹かれ受験をした。入学後は毎年県内の離島診療所での研修をさせていただき、医療の原点を見つけた気がした。そして、中部病院での長期合宿のような2年間の研修を経て、北大東島で3年、西表島で2年勤務させていただいた。医者一人、看護師一人、島の人全ての健康問題に対応しなければならなかった。たまには島の青年の金銭問題や恋愛問題、中学生の受験問題などにも対応した。その中で幸せな人生とは何か、医者に出来ることは何か、医療の限界はどこにあるのか、有り余る時間を使って考えさせられた。私は島で医者として、そして、それ以前に一社会人として育てていただいた。一つはっきりと分かったことは自分一人で出来ることは少ない、と言うことであった。人は皆助け合って生きていけるのだと痛感した。医療もそうだ。

離島勤務を終え、県立中部病院での勤務をさせていただけることになって、救急医療に関わるようになった。その頃、県でも病院前救急と病院の連携強化を目指すメディカルコントロール体制の立ち上げの時期であった。キーワードは救急隊と病院側の「顔の見える関係」であった。消防関係者と交流を深める中、現在ニライ消防北谷署署長の金城俊昭さんに中の町の焼鳥屋に呼び出された。それまで仕事上の会話しかなかった消防の皆さんと、これまでの経歴など色々と話す内、離島医療についての話題となり、「テレビのDrコトーを見ていると離島医療は大変ですね」

という一言で私のシマ医者魂に火がついた。ドラマと現実は違うこと、柴咲コウはいなかったこと（負けず劣らず魅力的な人はいますよ！）、診療所では手術なんかはしない（できない？いや、しなくて良い医療体制がある）こと、島の

人に応急処置を覚えてもらうことに力を入れていたが、一人ではなかなか上手く指導できなかったこと、沖縄の離島医療の現状などベラベラとしゃべり続けた（と思う。酔っていたためかよく覚えていないのだが)。そのとき、金城さんから考えてもみなかった反応があったのだ。
「我々がみんなで島に行けば何かできることがあるんじゃないか」

みんなで島に行って指導をすれば効率よく多くの人が応急手当の知識・技術を習得できるのではないか、というのである。

「命どぅ宝～命のゆいまーるプロジェクト～」が誕生した瞬間であった。その後、メーリングリストでのやりとりを繰り返し、半年後の2004年5月に津堅島での第一回目の講習会を開催したのであった。住民20名の受講者に対し、会の趣旨に賛同した、職場も職種も異なる救急救命士、救急隊員、消防学校初任科学生、看護師、医師など34人が島に乗り込んだのであった。前日に指導者養成の勉強会を開き、翌日講習会を開いた。救急車がない島の実情にそった現実的な対応を想定し、診療所、消防との連携を確認しながら津堅島での緊急時にはどのように対応するのが良いのか、実際に携帯電話から119するとどこにつながるのか確認もした。その後も試行錯誤を繰り返しながら、これまでに島からの要請に応える形で17の離島(津堅島、伊平屋島、阿嘉島、座間味島、粟国島　南大東島、北大東島、古宇利島、小浜島、黒島、波照間島、渡嘉敷島、伊江島、西表島、竹富島、渡名喜島、鳩間島）で、60回を超える講習会を実施し2,000名以上の離島住民に応急手当講習会を受講していただいた。旅費など地元役場の援助や地域医療振興協会からの援助を頂きながら、地元の要望に応えるべく活動を継続しているところである。小浜島では、おそらく県内最初の市民による心肺蘇生・除細動にて完全に社会復帰を成し遂げた症例もあった。対応した方も当会の講習を受講した方であったため、皆で大喜びし、さらに継続に向け力が入った。

波照間にて

北大東にて

離島での講習をしながら、島で頑張っている医師・看護師・保健師が孤独じゃないというメッセージを伝え、島々の皆さんと交流し、人や自然に癒され、そして日々の仕事への活力を頂いている。

皆さんも一緒に島に行ってみませんか？離島医療に興味がある、皆と楽しく飲み会に参加できる、船に乗り遅れない、というのが参加条件です。ご連絡をお待ちしています！

西表にて

# 随筆

## ギャンブル狂時代

ハートライフ病院 消化器内科
佐久川　廣

学生時代は、お金は無いが時間はたっぷりある。自分の学生時代も例に洩れずであった。昭和50年から6年間新潟で過ごしたが、金が無いのはしょっちゅうであった。月々の生活費は親からの仕送りと奨学金、それとバイトでの収入で、国立大学の平均的な学生の生活費であったと思う。しかし、何故かいつもお金が不足がちであった。時間があれば勉強すればいいのだが、元々好きではないので、ついつい街に出掛ける。誘惑も多いので、いつのまにか生活費が底をつくということを繰り返していた。

雪国の冬は炬燵が欠かせない。自然にマージャンが盛んになる。マージャンはゼロサムゲームである。本締めはいないので、雀荘を利用しなければ、場所代もいらない。効率の良いギャンブルである。初心者の頃はどうしても授業料を払うことになるが、だんだん上達する。その頃には下宿にカモの下級生が入ってきて、授業料を取り返す日がやってくる。極めて公平なギャンブルである。

ギャンブルが商売として成り立つのは基本的には客が損するからである。例えば、パチンコの場合、客が使ったお金の数パーセントは店の収入となる。客にどれだけ払い戻すか、いわゆる期待値はギャンブルの種類によって異なる。ギャンブル研究の第一人者である谷岡一朗氏によれば、パチンコは期待値が良い方のギャンブルで、97％である。その他、ラスベガスのルーレットは95％、競馬は75％、最も期待値が低いのが宝くじで、46.4％である。競馬や宝くじは、「無知な人間に課せられた第二の税金」と言われているようである。パチンコの期待値が97％だと言ったら、高校の友達に「そんなバカな、あり得ない。」と激しく反論された。よっぽど沖縄のパチンコ屋の出が悪いのかと思い、敢えて反論しなかった。

学生の頃仕送り日の1週間前に財布が空になったことがあった。部屋中の小銭をかき集めても60円程しかなく、それでパンを1個買って何とか1日だけ過ごしたが、1週間は長い。しかし、運良く繁華街にあったパチンコ店が新台入れ替えとの情報が入った。新台入れ替えはパチンコ店のサービス期間で、客に還元してくれる。さっそく無一文でパチンコ屋を覗いてみると友達が出る台をキープしてくれていた。神様、仏様と拝みたい心境であった。それから、しばらく連日のようにパチンコ屋で生活費を稼いでいた。パチンコは先に説明したように期待値の高いギャンブルである。しかしながら、高校の友達のように多くの人が損をしている。したがって、上手くやれば勝ち組に入れる。出る台の前に座れば誰でも勝てるのであるが、どの台が出るのかという情報を入手することが一般の人にはなかなかできないので、負ける人が多いのである。暇な大学生は情報を入手する手段が抱負である。

新潟は公営ギャンブルが盛んであった。新潟市の郊外の豊栄という所に中央競馬を開催する競馬場があり、春の一時期と夏競馬が開催されていた。競馬場は陸上競技上の何倍もの広さがあり、ホームストレッチの直線の距離は400m以上もある。観客のほとんどは勤め人風の男性か自営業営む人たちで、学生風の観客も時々見かけた。今では女性客も多いようであるが、当時は少なかった。観覧席と馬場との間にスペースが広くとられており、多くのファンがフェンスの近くに陣取り、声援を送っていた。競馬場に来ると不思議なことに大きな声が自然に出てきた。「よしやったー」とか「それゆけテンポイント」などの掛け声がそこら中から聞こえてきた。実に楽しい場所だが、ほとんどの場合、いつのまにか懐がスッカラカンになっていた。帰りのバス代だけはなんとかキープしているが、つかの間の夢の代償は大きかった。

あまりよく負けるので、必死になって必勝法を研究したことがあった。一番人気の馬の単勝馬券を買い続けるのとどのくらいの払い戻しになるのか、複勝の馬券ではどうかとか、しかしながら、どれもうまくいかない。だいたい75％の期待値のギャンブルに必勝法などあるわけがない。

夏の中央競馬が開催された初日に友達から競馬場に誘われた。あいにく持ち合わせが千円しかなく、誘いを断るしかなかった。お金が無い時は大人しくしているのが一番であるが、なけなしの千円を友達に預けて、8レースの連勝複式馬券を頼むことにした。もし、それが当たった場合、次の9レースに払い戻し金を全部使って、勝負馬券を買ってくれという伝言を付け加えた。連勝複式馬券の組み合わせは30通りくらいあるので、1点買いではなかなか当たらない。ほとんど期待もせず友達に千円を託したのだが、奇跡的に2レース連続して当ててしまった。8レースで当たったときに次のレースはどうするのかその友達は私に電話で確かめたかったようであるが、あいにく不在で連絡がとれなかったと後で聞かされた。それで元金の千円だけ残して、6千円くらいを次のレースの1点買いにつぎ込んだようであった。今だったら携帯電話で簡単に連絡をとれるが、当時は幸運にもそんな便利なものはなかった。恐らく電話を受けていたら次のレースはキャンセルしていただろう。連続して当たることはほとんどないということはよく知っていたからである。

卒業しても時々その友達に電話して馬券を買ってもらっていた。日本ダービーのあった日の夜に何故かすし屋のカウンターに座っていた。その日の昼間は仕事があり、ダービーの結果は知らなかった。カウンター越しにテレビのスポーツニュースを見ていたら、競馬の画面が出てきた。もちろんダイジェスト版であるから、レースの途中を端折っていきなり最後の直線が映像で流れてきた。そしたらなんと自分が連勝複式馬券を買った2頭の馬が、直線の途中で先頭に踊り出てきた。脚色も悪くない、思わすビールの入ったコップを握り締めた。そして、カウンターに他のお客さんがいるのを忘れて、テレビの画面に向かって思わず叫んでしまった。「そのまま～!!」。